



四万十町
町内「ぶら〜り」散策

大鶴津

お
お
つ
つ
つ

先月号の小鶴津に続き大鶴津である。太平洋の絶景を望む断崖絶壁に沿って続く道を行くと小鶴津、大鶴津であるが、道の入り口は通行止めの看板が立てられていると、先月号で書いた。この通行止の看板のすぐ横に、もう一つ看板がある。国指定天然記念物の「小鶴津の興津メランジュと震源断層」の案内で、約5000万年前に発生した南海地震を裏付けているとの解説が記されている。

大鶴津は、小鶴津よりさらに南下する。大鶴津のすぐ南側は興津であるが、興津から大鶴津へ向かう道はない。そもそもは、小鶴津の「鶴」が「弦」であったように、大鶴津も「大弦津」であったが、戦国期天正年間の地検帳には「大鶴津」と記されているようである。「鶴」と「弦」。これは地形に由来するものなのか、あるいはこの地にたどり着いた平家の落人たちに関係するものなのかは想像するしかなく、いずれも命名の由来は不明である。

江戸時代寛保年間(徳川吉宗の時代)は、9世帯・44名が、また、江戸後期享和年間(徳川家斉の時代)には、7世帯・45名が暮らしていたとの記録がみえ、集落として機能していたことがうかがえる。小鶴津と同じく、江戸末期には、志和5カ村の庄屋の支配下にあり、名本という、村長のような役職が置かれていたとある。

村内には、須佐之男命を祀る須賀神社と、大山祇神を祀る大元神社があった。これら二つの神社は、この地が平家の落人によって拓かれたことを想像させるものである。まず、須賀神社は「祇園信仰」の神社で、その総

本社である現在の八坂神社は、平家隆盛の頃の本拠地・京都にあり、また、神戸市兵庫区の祇園神社は、福原(現・神戸市)に都を作った平清盛ゆかりの神社として知られている。さらに、大山祇を祀る大元神社の総本社は愛媛県今治市の大山祇神社で、古くから山の神・海の神・戦いの神として朝廷や武将たちからの信奉を集め、源氏・平家からも貴重な武具が奉納されてきた。これは平安末期の源平衝突の舞台となった瀬戸内海の制海権掌握を狙う両陣営の思惑の表れとみられている。両陣営による武具の奉納合戦は、大山祇神社を根拠地とする伊予三島水軍をどちらが味方につけるかという争いの意味があったというのである。

平家の落人たちが初めに流れ着いたのは小鶴津だったのか、大鶴津だったのかはわからない。しかし、これまでの自分たちの文化や価値観を継承しながら、この大鶴津で集落を形成してきたことは、どうやら間違いないささうである。

大鶴津地区は平成26年2月に、住民が0となり、その長い歴史に幕を下ろしている。



小鶴津の興津メランジュと震源断層の案内板。

| 町のうごき | | | | 四万十川の水質状況 | | | |
|---------|---------|-----|----------|-----------|----|------|--------|
| (7月31日) | 人口 | 前月比 | | 出生 | 死亡 | 転入 | 転出 |
| 男 | 7,883 | -16 | 男 | 4 | 20 | 11 | 11 |
| 女 | 8,675 | -15 | 女 | 3 | 16 | 13 | 15 |
| 計 | 16,558 | -31 | 計 | 7 | 36 | 24 | 26 |
| 世帯数 | 8,379 | -11 | (7月中の届出) | | | | |
| 窪川地域 | 11,716人 | | 大正地域 | 2,314人 | | 十和地域 | 2,528人 |

| | 適正值(mg/l) | 8月7日 |
|----------|-----------|--------|
| リン酸 | ≤ 1.0 | 測定範囲以下 |
| 硝酸 | ≤ 0.5 | 0.252 |
| アンモニウム | ≤ 5.0 | 測定範囲以下 |
| アニオン活性剤 | ≤ 1.0 | 0.75 |
| 化学的酸素要求量 | ≤ 10.0 | 2.739 |

調査：大正(吾川)
資料：四万十高校自然環境部